

特集9・鍼灸との出会い(その1)

母の認知症(レビー小体型)と鍼灸治療

鍼灸専門学校3年生 佐川 聖子

(シルバーコースにて講演)

私の母は現在74歳です。病気にならないければ、夫婦や友人達と旅行等をして楽しんでいた年齢かもしれません。

7年前からうつ症状が出始め、車の運転で道を迷うようになったり、認知症と疑われる言動が目立ち、次第に被害妄想、暴力へとエスカレートしていきました。当時、病院では「とりあえずアリセプト」が主流のようで、その頃から母は一気に悪化していった記憶があります。同居する父と近所に住む私は、一日一日を無事に過ごすことに精一杯でした。

3年後、専門の病院で検査を受け「レビー小体型認知症」と告げられました。この病気の特長は、薬の副作用が出やすいことです。これまで、暴力を抑える為、様々な薬を試しては副作用を発症し、身体も心もボロボロになっていく母を見て、いたたまれない気持ちになりました。

薬以外に他に治療法はないものかと色々と調べ、サプリを購入したり、音楽療法や様々な治療法を試しました。しかし、どれも高額で長続き出来そうなものがない上、弱い立場の人を足元に見て、病気を商業化している現実を知りショックを隠せませんでした。

そのような時、図書館でふと東洋医学の本を手に入れました。そこには、鍼によるアルツハイマー治療法が書かれていました。早速、著者である先生の元へ母を連れて行きました。しばらく通った後、先生から「アルツハイマー治療に特化された日本一の先生をご紹介します」と老人病研究会の兵頭先生をご紹介頂いたのがきっかけで、現在も母は三焦鍼法に

よる鍼治療を受けています。

あんなに興奮、暴力がひどかった、母も兵頭先生の治療が終わった頃にはにこやかにになり、往復利用したタクシーの運転手さんが「同じお母さんですか」と私に聞いた程です。

兵頭先生にお礼を申し上げると「私は何もしていませんよ。お母様ご自身の免疫力です。私はそのスイッチをお手伝いさせて頂いただけですよ。」と日本一の先生は謙虚におっしゃいます。私は母の治療で患者や家族の気持ちに寄り添って診て頂いたのは初めてでしたので感銘を受けたと同時に、もっと早く知っていたらとも思いました。

2025年には認知症患者数は700万人前後に達するといわれています。母のように薬の副作用に苦しむことなく、患者や家族が笑顔になれる三焦鍼法の治療法が世の中に知られ、日本を救う求心力となることを願っています。

今まで色々ありましたが、兵頭先生初め、西洋医学の観点から病気に真摯に向き合うよう、ご指導下さった川並先生。そして、家族が手に負えなくなった時期に10カ月間、舞浜倶楽部に入居させて頂き、手厚いケアを受けられたこと。様々な出会いとご縁に恵まれ、感謝の気持ちで一杯です。

最後に私事ではございますが、母のお陰で鍼治療に興味を持ち、鍼灸学校に入学し、今年3年生になります。患者さんやご家族の喜びとして受け止められるような鍼灸師を目指して頑張りたいと思います。今後とも、母共々よろしくお願ひ致します。